

プロジェクト学習的アプローチによる主体的・対話的な学びへの試行

～高等学校「社会と情報」の授業実践を通して～

小川 潔¹⁾, 岡田 大爾²⁾

(広島国際大学非常勤講師)¹⁾ (広島国際大学心理科学部教職教室)²⁾

【要旨】

本論文では、アクティブ・ラーニングの視点で、これまでの授業実践を振り返り、主体的・対話的で深い学びにつながる授業になっているのか検討した。その際、関心・意欲・態度を育てる評価からメタ認知能力の育成を図っていくことも振り返り、授業実践に生かした。そして、経験学習モデルや省察の概念から、学ぶことの本質・意義を踏まえた上で、生徒が自分の学習の舵取りを自分で行う生徒像とその授業のイメージを持って実践を試みた。

その結果、一人一人の学びには多様性があり、自己評価能力の発達段階の指標によって学びの質や内容が異なる状況を確認した。また、指導者自身が、生徒個々の学習の質を捉えることができ、多様性に応じた指導・支援等のかかわり方も求められることが改めて確認できた。

1. はじめに

平成 26 年度に文部科学大臣より中央教育審議会への諮問がなされた¹⁾。これを受け、同年に中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程特別部会が設置され、平成 27 年に「論点整理」がまとめられた。この中で各学校及び教員一人一人に、学習する子供の視点に立ち育成すべき資質・能力の「三つの柱」の育成を踏まえた教育課程の編成と主体的・対話的で深い学び「アクティブ・ラーニング」の展開が求められている。これは「何を知っているか」に止まることなく、「知っていることを使ってどのように社会・世界と関わるか」という活用を重視したものである²⁾。

本論文では、これまでの授業実践を振り返り、アクティブ・ラーニングの視点で見直し、主体的・対話的で深い学びに結び付き、「何ができ何がわかったか」を生徒自身が実感できる授業に成り得ているか検討した。そして、学ぶことの本質・意義を踏まえた上で、生徒の自己評価能力の発達段階によって異なる学びの状況に応じた指導を高等学校「社会と情報」の授業において試みた。

2. アクティブ・ラーニングで求められているもの

現在、教育現場では、アクティブ・ラーニングを導入し、研修が盛んに行われているが、活動を取り入れることが目的化しないよう問い直すことが必要である。アクティブ・ラーニングにおけるグループ活動では、話し合いを通して生徒は、主体的に話し合う意味・価値を見出し、何かを学び、何らかの力を付ける。文部科学省の用語集には、「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション

ン,ディベート,グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。」とある³⁾。

平成19年の改正学校教育法第30条において、学力の3要素が明確化された。そして、上述の「論点整理」の中で育成すべき資質・能力の「3つの柱」が打ち出され、生徒を基点とした主体的・対話的で深い学びが求められた。「ただ、活動しているだけでなく、生徒たちが活動しながら、その活動が何のためのものか認識し、その活動によって、自分自身の変化や深化を自覚し、それを何らかの形で表明あるいは形にする。」と生徒の主体的な学習が求められている。生徒が主体的な学習へと向かうためには、教師がどうかかわるか、その指導・支援の内容とタイミングが重要である。生徒が自分の学習を自分で舵取りをして、自分で知識・技能を獲得する学ぶ意欲は、資質・能力育成の上で意義深いと考えられる。

3. 学習評価について

平成27年8月20日の「資料1 教育課程企画特別部会 論点整理(案)」では、学習評価について次のように述べている。

子供たちの学習状況を評価するために、教員は、個々の授業のねらいをどこまでどのように達成したかだけでなく、子供たち一人一人が、前の学びからどのように成長しているか、より深い学びに向かっているかどうかを捉えていくことが必要である。

小・中学校を中心に定着してきたこれまでの学習評価の成果を踏まえつつ、目標に準拠した評価を更に進めていくためには、学力の三要素との関係を更に明確にし、育成すべき資質・能力の三つの柱に沿って各教科の指導改善等が図られることが求められている。

なお、こうした観点別学習状況の評価については、義務教育までに培われた資質・能力を、高等学校教育を通じて更に発展・向上させることができるよう、高等学校教育においても、観点別学習状況の評価をさらに普及させていく必要があるとされている。

一人一人の学びの多様性に応じて、学習の過程における形成的な評価を行い、生徒たちの資質・能力がどのように伸び、生徒たちが学習の価値を認め、その意味に気付かせることが求められる。

4. アクティブ・ラーニングに関わる教育方法について

大学の「教育学」「教育原理」の授業の中で、学生の被教育体験を基に教育実践の原理・原則を考察し、これに基づいて高等学校での授業改善を図っている。

問題解決学習を提唱したデューイ、その影響を受けたキルパトリックによるプロジェクト・メソッドを授業実践のベースとしている。具体的には生徒が所定の目的に向かって計画を立てて活動するプロジェクトを、目標設定、計画、

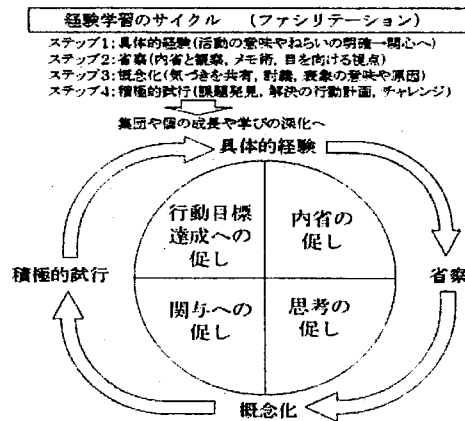


図1 コルブの経験学習モデル

展開、評価の4段階に組織化した教授段階を学習展開に組み込む。

さらに、デイビッド・コルブによって、デューイの経験と学習に関する理論⁴が、「活動-内省」「経験-抽象」という論理空間に構成しなおされ、これら諸関係のあいだに循環型サイクルを仮定し構築された経験学習モデル（図1）という概念、ドナルド・ショーンによる「省察的実践家」の概念⁵を、指導過程において特に授業改善に活用している。このショーンの提唱する「省察（リフレクション）」は、よりよい授業状況にするために主体的・対話的学びを目指し指導途中でも、授業リフレクションをする。

そして、ブルーナーの発見学習⁶により、生徒が主体的、能動的に活動して、生徒の一人一人がそれぞれのやり方で学習活動を行っていく最初の段階は生徒達が問題意識を持って具体的事象を観察することから始まることから、授業の始まりで、学習の目的・目標意識を持たすことを、これまで以上に導入段階で配慮していく。

5. これまでの授業実践の見直し

これまでの授業実践には、主体的な学び、問題発見・解決の場はなかったか、改善すべきところはないか振り返る^{7,8}。

5.1 実践の概要について

技術・家庭科の特徴は、ものを作ったり、実物に触れたりする体験を通して、様々な課題に対しどう取り組み、どう問題解決を図りながら学習をすすめるかにある。

5.2 自ら学ぶ意欲を高める学習指導過程及び評価の試み

技術・家庭科における問題解決過程は次のすじ道で基本的に進めている（図2）。技術・家庭科においては、プロジェクト学習を基本ベースとして、①プロジェクトの選定をする、②計画を立てる、③実行する、④評価する、という段階を経ながら学習を進め、この過程において生徒は次々に現れる問題から課題を発見し、自ら考え判断し、問題解決を図る授業実践に取り組んできた^{9,10,11}。

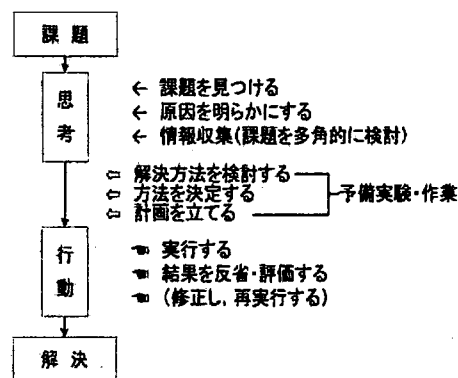


図2 問題解決のすじ道

木材加工において、道具の特徴を知り、道具を大切に育てる心と共には、生徒にゆさぶりをかけ、学習の中から出る疑問や失敗から問題解決を図っていく授業を行う（図3）。

のこぎりびきの失敗や疑問を公表し、その原因と解決方法を考え、失敗を生かして正しくのこぎりびきができることを目標とした。失敗や疑問を、①ノコに原因、②使い方に原因、③材料に原因の3つの視点で、自分の原因追究したいコースを選択させグループ分けした。①の追究コースは、身近かにある材料を用いてあさりの効果を顕著にするよう工夫し、あさりの片方しかないノコで切断するとまっすぐに切れないことや、あさりの無いノコで切断すると動きにくくなることに気づく。

②のコースは、同じノコを用い数人で切断実験すると一様にならなかった。このことから、頭の位置、持つ位置、角度、力の入れ方の違いに気づいた。のこぎりびきの動きを音からも考察した。③のコースは、節、厚さ、硬さ、形状などを考慮することに気づいた。けがき通り切断できたかOHPを活用して、垂直になっているか自己評価させた。

生活に生かし役立つ物を創造していく実践を通して、問題解決の場を位置づけ、主体的な学習活動の組織化を図る。教科指導における主体性の育成は、生徒に学びたいという意欲を起こさせる適切な動機づけを行うことによって、生徒自身に学習目標を設定させ、学習した成果を振り返る態度を身につけさせる。一人の生徒の作ったものの結果が悪い場合、その失敗や悩

	学 習 活 動	支 援	評 価 の 工 夫
導 入	○前時行ったのこぎり引きの失敗や気づきを発表する。	・自己評価表を見させる。	○進んで学習に取り組もうとしているか。 ・発表、チェックリスト 【関心・意欲・態度】
課 題 把 握 ・ 計 画	○失敗の解決方法を考える。 ①ノコの原因を考える。 ②使い方の原因を考える。 ③材料の原因を考える。 ○①～③について実践し確かめる。 ※ ①～③の原因がどこにあるのが明らかにするために生徒自身が辿りたい課題を追究することを選択する。 ○調べたり、確かめたりした結果を発表する。	・3つの視点で、それぞれ考えさせる。 ・実験の効果が顕著に現れる材料を提示する。 ・あさりの両方無いものと片方無いものを用意 ・材料の固定の仕方 ・湿らせた材料 ・切り始め、終わり ・音を聞かせる ・持つ位置 ・ノコの角度 ・節のある材料	○自分の追究したいことを決めたか。 ・チェックリスト 【関心・意欲・態度】 ○積極的に試そうとしたか。 ・材料をまっすぐ切断 ・湿った材料のノコの動き ・観察、チェックリスト 【関心・意欲・態度】 【創意工夫】 【技能】 ○自分の意見を発表できるか。 ・発表、チェックリスト 【関心・意欲・態度】
実 践	○切断する。	・①～③について考えさせ切断させる。	○正しく作業を進めているか。 ・材料、チェックリスト 【創意工夫】 【技能】
点 検 ・ 修 正	○自己評価する。	・OHPに投影した影によって垂直を観察させる。 ・直角定規にそって立つが観察させる。	○自己評価できたか。 【技能】 ○使用するノコの良否を判断できる。 【知識・理解】 ・自己評価表
ま と め	○次の学習内容を知る。 ○後片付けをする。	・次時の課題を意識させる。	

図3 ゆさぶりを意図した授業展開例

む場面があると、どう解決するか考えさせると共に、周りの生徒を集め、生徒個々に問題解決を迫り、意見交流させ、最良と考える方法を選択し解決を図った。

グループ学習においては、自分の考えや感じていることを発表する中で、相手の言うことを自分の考えや感じ方と比べ、自分の考えのおかしなところ、足りないところを修正し合えたという思いを抱き、グループ内でのコミュニケーションが深まったことなど学習に充実感があつた。グループ討議をどう仕組み組織化するかが、生徒を主体的・意欲的に活動させる要因の一つである。

5.3 実践を振り返って

失敗や疑問点は、問題解決するための課題であり、スタートである。生徒の失敗や疑問に対して、どこで何を考えさせるか発問を工夫し、何をさせるのか教材の構成を考えることがいる。そして、どこで何を評価し、自己評価させるかノートやワークシートの工夫、教具など、生徒自らが主体的に学習課題を明確にし、その解決に向かってどう取り組み、学習を自分でどう組み立てさせるか、生徒自ら授業を自己コントロールできるようどう支援するかが指導過程での課題であつた。製作体

験を積み重ねることから生徒の自己効力感が高まり、「やればできる」「集中できる」という、それまでに気づけなかった自分に気づき自己概念を形成していった。

6. 関心・意欲・態度の評価からメタ認知能力の育成を図ることを通して

学習過程の中で、様々な問題や課題に対処できる能力と学習に対する意欲や関心、態度を育成することは重要である。この評価は、生徒の内面的なことに関わることであり、測定したり類別したりするのは難しさがある。また、関心や意欲があるかのように装う状況も生じることも懸念され、客観性や信頼性に課題がある。

そこで、メタ認知能力（自らの学習活動をコントロールする能力）を育成する。自らの学習をコントロールする能力や自己管理する態度（次の①から⑤）を発揮することに傾注させる^{12,13}。

- ① 学習の主体は自分であるという意識変革を図り、学習目標の設定に参加させる。
- ② 自ら問題点を発見し課題の認知を図り、課題を設定しその解決の見通しを立てさせる。
- ③ 解決するための適切な方法を検討し、解決方法の選択を図り方法と手段を決定し計画を進める。
- ④ 結果を課題に照らし評価し、学習活動を自己評価する力を育成する。
- ⑤ 問題点を明確にし、目標を修正し再挑戦に努力する。プロジェクトへの参加意識と自己責任の意識を持たせる。

7. 高等学校「社会と情報」の授業実践

高等学校「社会と情報」では、情報機器や情報通信ネットワークなどを適切に活用して情報を収集、処理、表現するとともに効果的にコミュニケーションを行う能力を養うことを目的として、「旅行プランを立てよう」を協働的な学習課題とした(図4)。作成上の条件は(図5)に示す。

グループ学習では、①問題・課題の明確化として、取り組むべき具体的なテーマを明確にする。②情報の収集と分析をし、収集した資料を分析し取捨選択し到達目標達成のために資料整理する。③解決案の実行し、制約条件下で、テーマに対する解決案を考え、評価する。④報告書の作成として、行程表・予算書・地図・発表資料等の具体的な成果の形でまとめる。⑤成果の発表として、得られた成果を、第三者にも分かるように効果的に発表する。

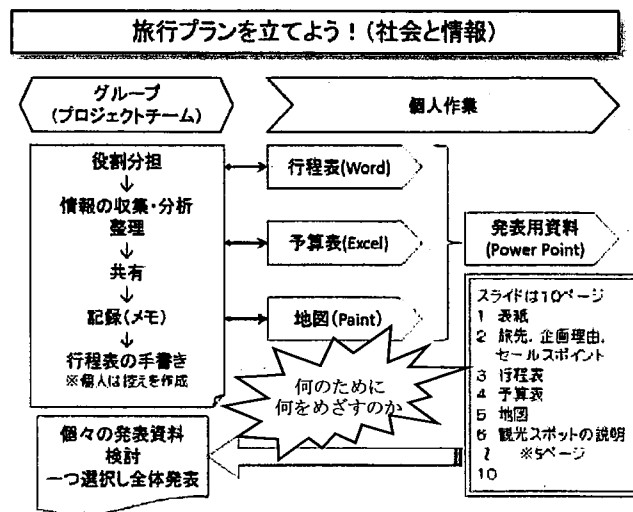


図4 板書イメージ(フロー図)

評価にあたっては、実習に必要な基礎知識を事前に教えた上で、まず取り組ませ、疑問や不明点は、その都度個別に支援と指導をする。課題を経験させ、苦勞することを体験することで操作を一つ一つ自分のものにする。また、良い作品などは他に見せたり発表することを意識させることで、学習意欲を引き出したり完成した満足感を持たせる。一人一人の良さを褒め学習意欲を高める評価に努める。生徒一人一人の情報（教材への関心・意欲の程度、学び方の学習経験、知識や技能の習得状況）をつかみ、具体的な説明と励ましを行うことによって、生徒の学習意欲や自己評価能力を高める。生徒とのコミュニケーションを図るとともに評価能力（内的基準と質）も高め、磨くことが必要である。

学習支援の面では、「どのような考えで取り組んでいるのか」「何を工夫しようとしているのか」「何に悩んでいるのか」など具体的な声かけをし、生徒の考えを確認することにより正確な評価とそれに対する具体的な支援をし、意欲を高める。さらに、ワークシート、板書による学習過程の全体像がイメージできるフロー図を提示し、主体的に取り組めるようにする。定着の難しい生徒や学習を自分で進められない生徒には、個別指導や生徒同士の教え合いを促して、助言から自ら考え工夫し自力解決していくことの大切さを伝える。

振り返りの場面では、どこまでどのように達成したかだけでなく、生徒一人一人が、前の学びからどう成長したか、より深い学びに向かっているか、具体的な視点を提示し考えさせる（図6）。

生徒とのコミュニケーションから思考・行動に対するプロセス評価は（図7）、①方向性を意識させるために、自己の能力に合った「めあて」をもてるよう一緒に考える、②めあて達成のための見通し、課題や方法を一緒に考え、めあて修正を行う、③意欲を維持するために、学び方や行い方、その活動を支援し、認める、④学び方や態度のよさを積極的にほめ、自信を持たせ、挑戦への意欲を持たせる、⑤少しの変化も見逃さないようにして、動きの高まりを実感させるおう共感し、さらに意欲の高揚を図る、⑥技能のポイント、学び方や行い方のさらに高いレベルアップへの技能課題を意識させ方向性を提案する、⑦学び方や行い方、態度等の伸びやよさを、取り上げ、全体に広げ知らせる、個人思考、学び合いの「キーワード」「手がかり」を示す。

- ★班別作業（約4名/班）
- ①旅行先の選択（国内9コースから）
 - ②行程の検討（情報収集）
 - ③行程表の作成（手書き）
- ★個人作業
- ①計4つのファイルを「3学期」フォルダに保存
 - ②行程表の作成（ワード：B4サイズで作成）
 - ③予算表の作成（エクセル）
 - ④地図の作成（ペイント）
 - ⑤発表用資料（パワーポイント）
 - ・セールスポイント
 - ・企画理由
 - ・行程表
 - ・予算表
 - ・地図
 - ・観光案内
- ★企画条件
- ・旅行会社のツアーでの観光は不可。
 - ・各コースとも、最低3泊4日とする。
 - ・費用には、食事・宿泊・交通・入場・拝観料など全てを含むものとする（お土産代は含まない）。
 - ・費用はオーバーしないこと！！
 - ・観光地は1箇所/1日を最低限度とする。
 - ・遊園地・動物園・水族館・スキー場等レジャー施設は4日中1か所のみ可。
 - ・北海道以外は全県を回る可。
 - ・泊まる場所は毎日替えること。（遠く都市・県に泊まる）
 - ・最低限観光名所を5箇所は回る可。
 - ・予算は1人あたりの予算であるが、複数人で割りきがある場合、班の人数分で割り、1人当たりの予算を行程表に書くこと。
 - ・徒歩で移動できる距離は30分までとする。（ただし、ウォーキングコース等は超えてよい）
 - ・移動手段として自家用車等は不可。
 - ・自転車はレンタル料を払うものとする。

図5 旅行プランの作成条件

振り返りの視点 - ①と②～⑦から選んで書こう -

本時の学習のねらいに対応して

- ①この時間の学習で分かったこと
- ②この時間の学習でよく分からなかったこと
- ③学習の方法でうまくいったことの理由
- ④学習の方法で失敗したことの理由
- ⑤もっと考えてみたいこと
- ⑥もっと調べてみたいこと
- ⑦もっと工夫してみたいこと

○新たな箇いの発見
○見方・考え方の
変容の自覚

図6 振り返りの視点

さらに、このグループ活動・個人作業の実習を通して、身につけさせたい問題解決能力（思考・行動）は、①課題を見つけだし、何が問題なのか明らかにする能力、②課題や問題に対して様々な角度から考え、必要な情報を収集する能力、③解決方法について比較検討する能力、④どの方法が適当か意志決定する能力、⑤意志決定に従い計画を立て実行する能力、⑥結果について反省・評価し、責任をもつなどの能力（自己評価能力）としている。

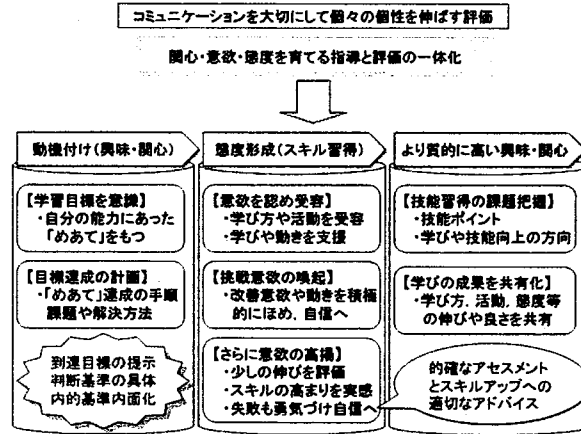


図7 関心・意欲・態度の育成

データ内容の読み取り・吟味、どう説明したら理解してもらえるか、それまでの知識との関連付けをし、自分の考えや説明の仕方について自己修正・改善していく。この過程の中で、自分自身の成長を確認し、可能性へのチャレンジ、社会貢献のための学びへの意欲、学び続ける意志につながることを期待する。

授業後の振り返りの自己評価は（図8）に示す。自己評価はメタ認知能力の育成には必要な要素であると捉えられており、自己評価の4つの発達段階が示されている^{12,14}。

生徒の自己評価から特徴的なものを、目的・目標意識の高低に対応して、①知識段階、②分析・理解段階、③評価の段階、④総合段階（メタ認

	目標・目的意識(高)	目標・目的意識(低)
④総合段階 学習したことを考察、次の学習目標へ位置づけ	○連絡ミスの発見をした。予算のミスにも気づき予算書を修正した。メモをきちんととり共有した。 ○実際に行くとき役に立つと思う。他の人にも楽しんでもらえるいいプランができた。 ○時間を意識しておかないと、予算が合わなかったり、行程がずれたりすることがわかり解決した。 ○時間がないので家で調べた。社会に出てwordやexcelが使いこなせるようになっておこうと思った。	
③評価の段階 何を学習し何を達成したか評価できる	○新幹線と電車の接続時刻が合うか調べ、安い運賃で行けるように調べた。時間調整が難しかった。 ○みんなと分担し、情報を図に描いて整理した。 ○地図を調べながらポイントで描いた。線を引くと文字が消えるので解決した。集中できた。	●実際に行かないのに旅行プラン作成は無駄。
②分析・理解段階 「私がうまくできたのは～のためだろう」	○Webページ「駅から」で調べたのでバスへの接続が解決した。 ○だんだん調べが早くなったので、次も頑張ろうと思った。完成が近づくと全体が見え楽しくなった。	○予算表ができた。先生が示した模範が参考になった。 ○ナビタイムが便利だった。
①知識段階 「私は～をした」		○色々調べた。 ●集中した ○路線を調べた。 ●よく学んだ。 ○運賃を調べた。 ○頑張った。時間がかかった。

図8 自己評価の発達段階

知能力の獲得)の4段階で学びの状況を分類した。目的・目標意識の高い場合、学びの記述において、語彙も豊富で、内容の具体性、協働性、自己に向き合う姿勢、社会貢献性など、学びの深さが顕著な傾向が確認できた。目的・目標意識を最初の段階で確実に意識づけることや、途中でも操作状況を確認しながら、方向性を意識させるために、自己の能力に合った「めあて」をもてるよう一緒に考え、個人思考、学び合いの「キーワード」「手がかり」を示すなど、自分の学習に自ら向き合

えるように働きかけていく必要がある(図中●印)。

8. 成果

本研究により、これまでの授業実践を振り返り、課題の発見・解決に向けた主体的・対話的な学びを目指し、授業実践を試みたところ、次のような4点の成果が見出された。

- (1) これまでの授業実践において、主体的な学習の場、具体的な学習活動の場の工夫(体験的な学習、選択コース別スタイルの学習、ペア・グループ・集団学習、振り返り)、課題や問題の提示の工夫、意欲喚起、問題発見させる時間と場、自力解決の時間確保、個々に応じた指導・支援など、課題の発見・解決に向けた主体的・対話的な学びに結びつくことが確認できた。
- (2) 学習指導において、主体的に活動できる場と時間を設定、生徒の個性及び個人差に配慮した学習支援を基底におき、体験→問題発見→解決方法やその方法の選択→問題解決といった体験を通しての学び、問題発見・解決による学びのプロセスが見出された。
- (3) 自己評価においては、関心・意欲をもって取り組む自分自身を自覚し、自尊感情・自己肯定感を高める機会となり、自分の進歩・成長を実感でき、積極的な態度形成につながった。このことから関心・意欲・態度の育成は、自己評価能力を次の段階へ引き上げることと、自己評価能力の発達段階や生徒個々の多様性に配慮した指導・支援により、学びの主体化に向け自ら一歩踏み出した自己概念を形成していることが確認できた。
- (4) グループ活動による、一人一人の思考を付き合わせ、よりよい答えを生み出す話し合い、第三者に伝えるためのプレゼン資料の編集作成作業等の協働的な場において、意欲的に取り組める適切な「キーワード」「手がかり」を示すことで、個人やグループの良さを再認識できた。

9. 課題

生徒には様々な状況(心理的・身体的・環境的)の背景があり、学びへのモチベーションを教員の期待通り持って授業に臨むとは限らない。本研究により、次のような5点の課題が見出された。

- (1) アクティブ・ラーニングの趣旨に沿う、問題解決のための課題提示になっているのか、問題解決の授業になっているのか、省察の観点(自問自答、自己吟味、自己研鑽と試行)で振り返り授業構想の練り直し・練り上げ、リ・デザインすべく学び続けることが必要である。
- (2) 問題意識を欠いたまま発見学習に参加させると、ただパソコンの画面を観て終わりになる「体験あって学び無し」の授業となる。意義を見い出せず、しだいに学習意欲を失い途中で挫折感を味合わせる結果になる。目標・目的意識(ビジョン)は重要である。
- (3) 検索操作を同じようにしていても、何の問題意識も起さない生徒がいることを気かけ、タイミングを逃さず指導と助言、ヒントを繰返して、生徒のところに問題意識・挑戦意欲が芽生えるように働きかける努力が必要である。体験の経験化に向け、活動の意味付け・価値付け・省察・気づきの共有・課題発見・積極的試行・社会貢献性を意識させる必要がある。
- (4) 協働的な学習では、レディネスが不十分な状況であると、グループとしての機能も、プロジェクトそのものの遂行も困難となる。知識・技能の既習事項の再習得を工夫するなど、細やかな

指導・支援により、不十分な体験に陥らないように導いたり気づかせたりする必要がある。

- (5) 受け身にしない授業のために、めあて（学習課題）や方向付けをあらかじめきちんと提示しゴールイメージの明確化が必要である。何がわかるようになるのか、どんな力を身につけるのか、今悩んでいるのは何か、身についたことが何に結びつくのか、自分で考え、やりきらせる小さな成功体験を積み重ねることにより自信を持たせ、次への挑戦ができるような働きかけが必要である。

<引用・参考文献>

- 1) 文部科学省 (http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1353440.htm) 「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問）」平成26年11月26日。
- 2) 教育課程企画特別部会(file:///C:/Users/USER/AppData/Local/Microsoft/Windows/INetCache/IE/521TC6F2/1361110.pdf) 「論点整理（案）」、平成27年8月、pp.1-41.
- 3) 文部科学省（中央教育審議会）『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）用語集』、p37.
- 4) デューイ,J.著〔市村 尚久訳〕(2004)『経験と教育』講談社学術文庫、pp.16-149.
- 5) 三品陽平(2015)「学校教育におけるドナルド・A・ショーンの省察的実践論の再検討～個人の省察的実践から組織の省察的実践へ～」『博士論文』（名古屋大学）、pp.1-128.
- 6) ブルーナー,J.S.著〔鈴木 祥蔵, 佐藤 三郎訳〕(1963)『教育の過程』岩波書店、pp.35-36, pp.42-69, pp.80-81.
- 7) 小川潔(1997)「問題解決能力を育てる学習指導と評価の工夫改善」『平成9年中学校教育課程改善講座（技術・家庭）』、pp.1-2.
- 8) 梶川 宏, 永井邦雄, 出木栄子, 永森政之, 宗本祥子, 澄川利之, 竹野英敏(1998)「豊かな学力を育む学習指導に関する研究」『広島県立教育センター研究紀要』25, pp.20-39.
- 9) 上之園哲也, 森山潤(2012)「技術科教育における生活応用力を育成する学習指導方法に関する研究課題の展望」『学校教育学研究』24, pp.127-136.
- 10) 榊原芳美, 奥野智子, 櫻坂麻規子(2013)「プロジェクト学習再考—学習者が学ぶべきこと—」『北海道国際交流センター夏期留学プログラム』28, pp.1-9.
- 11) 倉元博美(2007)「一斉授業に発見学習を融合したネットワーク利用の授業設計」『鹿児島女子短期大学紀要』42, pp.147-152.
- 12) 鈴木秀幸(1998)「自己評価からメタ認知へ—イギリスにおける自己評価の指導—」, 日本教育評価研究会, 『指導と評価』44, 日本図書文化協会.
- 13) Pole,C.J.(1993) *Assessing and Recording Achievement*,Buckingham,UK:Open University Press,pp.1-154.
- 14) 細田智子(2011)「幼児期におけるメタ認知の発達と支援」『武庫川女子大学紀要』59, pp.11-42.